

# 六角塔婆について

## ・はじめに

昨今、日本各地において葬送儀礼の簡素化が急激に進んでおります。それは仕事に忙殺される現代社会では当然の流れと受け止めねばならない一方、個の肥大化において、死者への尊厳を失った現代人の心の枯渇でもあります。葬送儀礼とは、今ある自分の生命は先祖があつてこそという深い感謝の気持ち、儀礼になつたものであります。その一つ一つの意味由来がきちんと受け継がれることが困難になつてしまつた現代の状況こそが、簡素化に拍車をかけていると私は考えております。そこで、不定期ではありますが、未だに失われずに残つてはいるものの、その意味が忘れ去られてしまつていく葬送儀礼を取り上げて、出来るだけ分かり易く何回かに分けて解説していきたいと思つております。今回は、葬具の一つである「六角塔婆」について解説致します。

## ・仏教的意味

六角塔婆は、今でこそ納骨当日に建てる人が多いですが、地域によつては埋葬（土葬の時代）の三日後に盛土の上に建てたそうです。これを俗に「塚がため」とも称しました。六角のそれぞれの面には、例を挙げれば、阿弥陀三尊（阿弥陀如来、觀世音菩薩、勢至菩薩）を表す梵字や、真言宗で主に唱えられる「光明真言」というお経を梵字で描きます。それは、仏様の功德（善い力）によつて、故人が迷わず仏の浄土に赴くことができ、その地にて安らかなることを祈念するためのものです。

## ・荒魂と和魂

一方、六角塔婆の起源は不明な部分が多く、必ずしも仏教独自のものではないという説もあります。今は六角塔婆と称して、仏教的葬具として捉えています。実は仏教と結びつく以前から存在したと考える説もあります。

その昔、死者の魂を荒魂あらみたまと呼び恐れた時代がありました。そして荒魂は、懇ねんじろに供養し時間が経つと和魂なごみたまという穏やかな魂になると言われています。その変化するまでの期間を殯おくりと称して、本来のお墓とは別の場所に死者を安置し、鎮魂しました。そして和魂になれば、通常のお墓に魂を移すのですが、その時の魂の依り代が六角塔婆の起源ではないかという説があります。つまり、移動する際の魂の乗り物とでもいいでしょうか。

## ・扱い方の一伝

また、地域によつては棺を埋める際、その埋め方の指南が残されています。その指南に六角塔婆が関係しています。その内容は、棺を埋葬する時、棺と六角塔婆の根本は必ず触れていなければならぬというものです。しかし、六角塔婆に十分な長さがないとそれは不可能でした。そこで、棺に届かない場合の指南もあります。それは、埋める前に必ず一度、六角塔婆の根元を棺につけて軽く土をかけるとい

うものです。一度、棺と六角塔婆を触れさせることが重要で、その行為によってあたかも常に触れているという状況を生み出すのです。その後は、六角塔婆を引き抜いて完全に棺を埋めます。そして再度六角塔婆を盛土の中央に建てます。

### ・イキツキタケ

六角塔婆を「イキツキタケ」と称する地域があるそうです。関東に見られ、長い青竹の節を抜いたものを用いて、先述の六角塔婆のように、棺の上部に触れるように盛り土の中央に立てます。その意味は、「死者が生き返ったら息ができるように」、「死しても土の下は苦しいだろうから息ができるように」などと伝わっているそうです。つまり「息つき竹」ということでしょう。中が空洞である竹が用いられたことも納得できます。先述しました、棺に六角塔婆の根本をつけるという指南も、ここから来ていると推測が出来そうです。つくばの田井地区にもまだ残っている地域があります。仏教的な六角塔婆とイキツキタケが共存している、どちらも立てるといふ地域もあります。

### ・まとめ

六角塔婆には様々な意味合いがあり、今回取り上げたことはほんの一例に過ぎません。しかし一番大事なことは、すべては「亡き人を思う気持ち」から生まれたということです。イキツキタケなどは、その最たるものといえます。あまりにも個が肥大化した現代において、過去、我々日本人は亡き人をどのように思い吊ってきたか、葬具を通じてそれを知ることがとても重要なことであると思います。

六角塔婆、そして今なおイキツキタケの伝承がある地域の皆様方には、どうかその習俗を保持し、後世にその意義を伝えて頂ければと思います。葬具から見えてくる、故人を思う気持ちの尊さ、優しさを胸に刻み、その心を現代の我々も見習っていくべきであると思います。